

出雲の ブラジル人

上

肌寒さを感じる今月初めの午前7時過ぎ、朝日が差し込む出雲市中心部の路上。薄緑色の作業着姿の日系ブラジル人らが一人、また一人と集まってくる。ポルトガル語で談笑したり、ヘッドホンで音楽を聴いたりしながら歩道に並び、迎えに来た派遣会社のマイクロバスに10人が乗り込んで、バスは2カ所で数人ずつを乗せると国道9号を東へ走り、斐川町上直江の「出雲村田製作所」に入っていた。

電子部品を製造する同社の正社員は約3千人。派遣社員の数には「生産規模にかかわる情報なので非公表」（人事担当者）だが、多くの日系ブラジル人が派遣労働者として働く。製品の「積層セラミックコンデンサー」は大きさ数ミ程度。同社によると、ブラジル人作業員は同じ製造ラインに集中させ、現場には派遣会社の通訳を置く。主に昼夜交代で製造機械のパネル操作などにあたるといふ。

出雲市と斐川町に外国人登録するブラジル人は9月末現在

景気の波にほんろう

デカセギ

在で974人。昨年末の県などの統計では県内のブラジル人の約9割が両市町に集中し

ていた。多くは「つした」デカセギ」の派遣労働者とその家族とみられる。

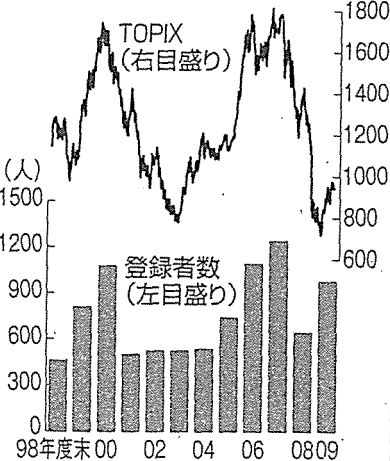
両市町のブラジル人登録者数は、改正入管法「キーワード参照」で日系人の就労が自由化された90年度にはわずか3人だった。その後、景気の動向に合わせて急増と急減を

繰り返す。IT不況のおおりに受けた01年度と、世界同時不況となった08年度は前年度の半分に減ったが、07年度は過去最高の1238人に。出雲市内にはブラジルの食料品や雑貨を扱う店もでき、昨年8月にはブラジル人と、自治体や派遣会社の関係者約50



出雲在住のブラジル人ら約500人が一堂に会した交流イベント。昨年8月、出雲市今市町

出雲市・斐川町のブラジル人登録者数と東証株価指数(TOPIX)



出雲市・斐川町の統計、東証ホームページから。03年度末以前は旧出雲市分。09年度は9月末現在

母国から見れば地球の裏側の日本で働く日系ブラジル人たち。言葉や文化の違いに戸惑いながらも出雲で暮らす、彼らの姿を追った。
(この連載は3回の予定で、玉置太郎が担当します)

0人が集まる交流イベントも開かれた。人材派遣会社「アバンセコ」(ポレシオン) (本社・愛知県一宮市) は、ブラジル国内に採用面接をする社員を置き、来日した労働者が母国に残した家族との連絡役も務める。斐川町内の営業所にもブラジル人スタッフがいて、アパートの借り上げや行政手続き、地域とのトラブル解消ま

来日してちょうど1年たった昨年12月、不況のおおりに派遣契約を打ち切られた。それでも、職業訓練校に通いな

一人暮らしのアパートの卓上には、日本語の辞書や小学校低学年向けの漢字テキストが並ぶ。12月の日本語能力試験を目指して勉強中だといふ。「ブラジルに帰りたいと思うこともあつけど、今はしっかりと働いて、自分の生きていく道を決めたい」。あどけなさの残る笑顔で話していた。

日系ブラジル人 主に1908年からの移民 事業でブラジルに渡った日本人の子孫。1990年の「出入国管理・難民認定法」改正で、日系2、3世とその家族は就労制限のない

日本滞在が認められ、国内への移住が増加した。法務省の統計では08年末現在、全国で約31万人のブラジル人が外国人登録し、国籍別では「中国」「韓国」「朝鮮」に次いで3番目に多い。

出雲の ブラジル人

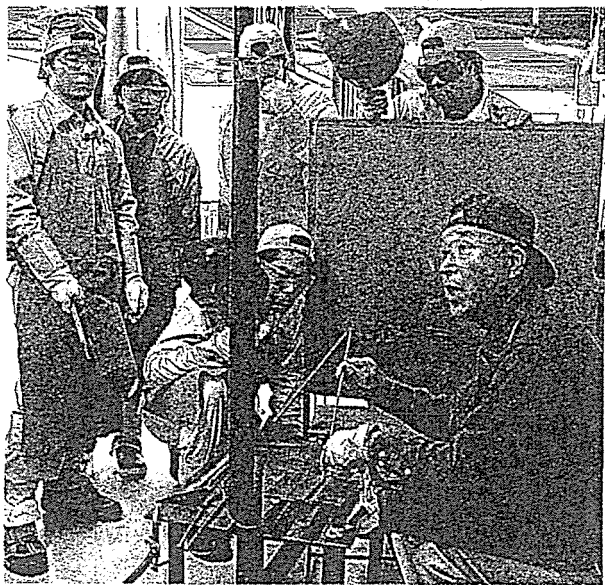
【中】

「仰向けになりますよ」
「ベッドのさくを持って下さい」
「県立出雲高等技術校(出雲市長浜町)で9月、日系ブラジル人ら27人が介護の職業訓練を受けていた。この日の課題は、肩にまひがある人を介護用ベッドに寝かせたまま着替えさせること。4月から来年1月まで、9カ月の講習を受ければ「ホームヘルパー2級」の資格が得られる。

受講生の碓マウリシオさん(34)は昨年11月に勤め先の派遣契約を打ち切られた。「日本語はある程度話せるけど、介護の専門用語は難しい」。講習の合間に「扶養」「保護者」といった漢字を繰り返し練習していた。

昨夏以降の世界同時不況のあおりを受け、出雲地域のブラジル人派遣労働者の多くが職を失った。今年4月、出雲市のブラジル人登録者数はピークだった昨年1月(1011人)の約4割まで減った。介護講習は失業対策の一環として県が開設した。21歳から62歳までの受講生

職業訓練



交代で高齢者役になって介護の訓練をする日系ブラジル人の講習生(9月、出雲市長浜町)と教官(右)から溶接作業の説明を受ける日系ブラジル人の訓練生ら(7月、松江市東朝日町)

再就職へひたむきに

のうち、日本語が十分に話せるのは半数程度。入校から3カ月は日本語学習に充て、介護の講習・実習にも通常コー

の6カ月をかける。今月下旬からは浜田市内の介護施設に向く実習が始まる。講習の講師を務める宮本ひとみさん(63)は「介護の技術を早くマスターしたいという熱意は強い。介護を受ける人の心のケアが最も大切なことを、理解してもらえよう努めています」と話す。

独立行政法人「雇用・能力開発機構島根センター」(松江市)も4月、ブラジル人向けの職業訓練コースを開設した。先月末までに、27人が金属溶接やのみ・かんなどを使った木工訓練を修了したが、うち十数人の就職先が今も見つかっていない。

福田孝・訓練課長は「ハローワークとも連携し、個別に面談をして職を探しているが、この景気では日本人の求職も難しいのが現状です」と話す。
ハローワーク出雲(出雲市)によると、同市と斐川町内の8月の有効求人倍率は0.61倍。昨年10月に1倍を切っていたが、低迷が続ぎ、製造業は特に厳しい。ブラジル人の求職者は昨年11月ごろから急増し、今年4月のピーク時には約110人にのぼった。

出雲高等技術校で介護講習を受ける受講生にも、同じ壁が立ちはたか。橋本幸雄校長は「彼らの訓練姿勢は他の課の模範にしたいくらい熱心。受け入れ側の施設にも理解してもらえよう、できる限りのサポートをしたい」と話す。
介護講習を受ける阿部パウロ・シズオさん(49)は来日して約10年になる。斐川町の工場で派遣社員として働いていたが、昨年12月に雇い止めになった。住んでいたアパートを退去し、今は市内の雇用促進住宅に単身で暮らす。

4カ月前、休日に近い老人ホームで入居者の話し相手をするボランティアを始めた。「介護の勉強につながる」と訓練校から紹介してもらった。「実際にお年寄りとお話をしていると、言葉や文化など学べるのがたくさんある。介護は心遣いが何より大切だとよく分かった」といふ。
家族は今もブラジルに残している。「介護の仕事が決まれば、出雲に呼んで一緒に暮らしたい」。阿部さんはそんな将来を思い描く。

島根

SHIMANE

山陰名産
あこ野焼・あこす巻

長岡屋

白湯店
TEL(0852)27-8911
FAX(0852)27-6651

北堀店
TEL(0852)24-5577

工場・浜乃木店
TEL(0852)27-2311

松江総局
松江市南田町32
☎0852(23)3330
FAX(27)2308

浜田支局
浜田市殿町88-3
☎0855(22)0442

出雲支局0853(21)0414
益田支局0856(22)0508
大田支局0854(82)0419

購読のお申し込みは
0120-33-0843
(7:00~21:00)

購読・配達のご用は
松江南 0852(24)3729
出雲北 0853(23)1611
安来 0854(22)6596
社 0853(53)2227
大斐川 0853(72)0421
西郷 08512(2)0702

※上記以外は近くのASAへ
広告のご用は
松江 0852(26)8180

出雲の ブラジル人

下

出雲市立塩冶小学校(同市塩冶町)にある「にほんこ」というプレイトがかかった教室。9月、講師の宮廻祐子さん(39)が黒板の読書風景の絵を指さしながら、3年生のブラジル人女子児童(9)に尋ねた。「本を?」。しばらく悩んだ児童は「読みます」と答え、笑顔を見せた。

廻さんは、「多いときには一度に3、4人を教えた。それぞれの児童の日本語レベルに合わせて授業を進めるのは苦労しますね」。担任教師や部活の顧問からも普段の様子を聞き取り、「その子が学校生活にとけ込めるよう気を配っています」と話す。

読や書き取りを練習していた。半年後にほかの児童と一緒に授業を受けることを目指しているという。

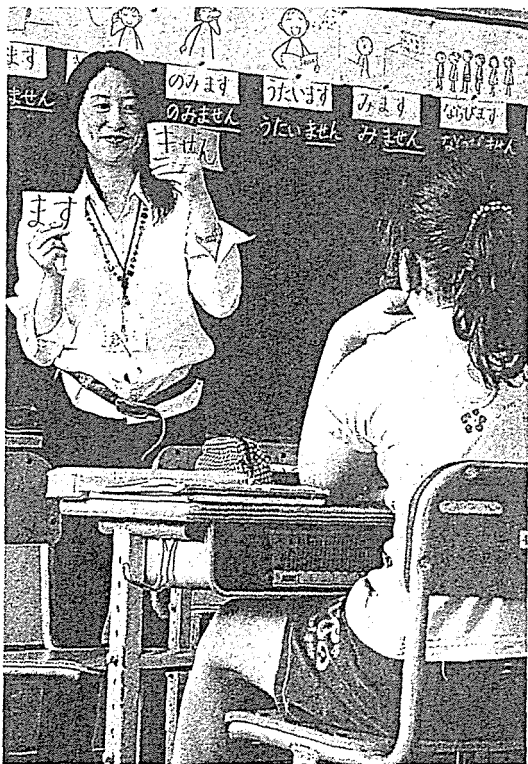
県教委から同校に派遣されている日本語支援教師は現在2人。同校に5年間勤める宮廻さんは1・25人。母国から家族を



国際交流イベントでブラジル料理を販売する原ロベルト・タダユキさん(右)と妻リディア・マスエさん=松江市学園南1丁目

学校で地域で支えて

共に暮らす



ブラジル人の児童(右)に動詞の使い方を教える宮廻祐子講師=出雲市塩冶町の市立塩冶小

呼び寄せて暮らす人もいる。出雲市内の市営住宅で妻、子ども3人と暮らす日系2世の原ロベルト・タダユキさん(53)もその一人だ。

ロベルトさんは90年に来日。東京で3年間働き、いったん帰国した後、00年から出雲市などで工場や土木関係の仕事を経てきたが、昨年12月に雇止めになった。9月まで職業訓練校に通い、今も求職中だ。

「仕事のことを考えると、帰国した方がやりやすい。けれど、子どもたちのことを考えると複雑なんです」とロベルトさんは言う。長男(23)と次男(21)は両国の言葉を話せるが、市内の中学校に通う長女(12)は日本で育ち、ポルトガル語が話せない。友達もたくさんでき、「日本で暮らしていきたい」と訴える。

日系2世の妻リディア・マスエさん(52)の父親は十代半ばでブラジルに移住した。生まれ育った日本に帰りたいという気持ちを持ち続けていた

父の姿を重ね合わせ、「日本で育った娘がブラジルに行きたくないという気持ちもわかります」と話す。

今年初め、出雲市の日本人ボランティアを中心にした市民グループ「ニッポ・ブラス」がブラジル人支援の活動を始めた。7月から週2回、同市の出雲体育館で開く日本語教室には、ボランティア数人と近くに住むブラジル人10人程度が集まる。

参加者の日本語レベルは様々で、漢字の書き取りやあて名書きの練習などの教材を作りして持ち寄る。世話人を務める出雲市の公務員江角秀人さん(58)は「せっかくなので、出雲で暮らし続けてほしい。会話をしても、まずは仲良くなることを目指しています」と、ブラジル人宅での食事会なども企画する。

原さん夫妻も教室に毎回出席し、日本語を教える立場になることもある。今月3日に松江市であった国際交流イベントでは、グループでブラジル料理店を出店した。ロベルトさんは「苦しいときに親切な人にたくさん出会い、自分も動かさなきゃという気持ちになった。グループの思いが、出雲で暮らすブラジル人に伝わればいいですね」と願う。(この連載は玉置太郎が担当しました)